

# 資料からみた先秦期三峡地域の 東西文化交流について

蒋                    剛：著  
周                    晓  萌：訳  
趙                    力  傑：訳<sup>(1)</sup>

本文で述べる峡江地域とは、現在の重慶市東部および湖北省西部を包括する地域となる。この地域は主に〔四川・重慶地域東部の〕川東褶曲帯〔the east sichuan fold belt〕と四川省・湖北省・湖南省・貴州省にかけての隆起帯によって構成され、長江がこの地域を南西から北東方向にむかって流れている。峡江地域は〔重慶市〕奉節県を境界として東西の二つの大きな地理的ブロックに分かれており、東は大巴山山脈から巫山山脈にかけての山岳地帯であり、また長江により浸食された地域では中低山や峡谷が続く。また西は浸食を受けた四川・重慶地域東部の低山や丘陵を主とする地域であり、また〔東北から西南に向けて何本も〕平行に嶺谷が走る地域でもある。

古代の人々は主に長江とその支流の兩岸の〔浸食によって形成され最下段から第一級、第二級と高くなる〕各級の台地で生き、人口を増やしていった。現在の考古学的発見から見ると、この地には200万年前にもさかのぼる巫山猿人〔200万年前と推定された「直立人巫山亜種」(Homo erectus wushanensis、ホモ・エレクトス・ウシャネンシス、巫山原人)を指す〕の残した遺跡があり、以降も古代の四川盆地と湖北省地域および中原地域とが交流する十字路となったのであった。

この地域はただ自然地理によって〔東西の〕二つの異なる地理的ブロックに分かたれており、しかも先秦期〔秦によって統一された紀元前221年より以前の時期を指す〕の考古学的発掘により判明した各種文化においても東と西とで明確な文化の相違があったにもかかわらず、それでも同時に幅広く文化交流を行ってきたのである。近年、三峡ダムで発掘された文物が相次いで公表され、研究者はこの地域に関する先秦時代の文化的系譜の構築や古代文化の変容・交流といった分野で、比較的多くの研究成果をうみだし<sup>(2)</sup>、既存の研

<sup>(1)</sup> 本稿の(丸括弧)および脚注は原著者による注、また〔亀甲括弧〕は訳者による補注である。

<sup>(2)</sup> 孫華『四川盆地の青銅時代』(科学出版社、二〇〇〇年)。余西雲「巴史——以三峡考古為証」(科学出版社、二〇一〇年)。于孟洲『峡江地区夏商時期考古学文化研究』(科学出版社、二〇一〇年)。白九江『重慶地区的新石器文化——以三峡地区為中心』(四川出版集团巴蜀書社、二〇一〇年)。高星・裴樹文『三峡遠古人類の足跡——三峡庫区旧石器時代考古的發見和研究』(四川出版集团巴蜀書社、二〇一〇年)。朱萍『楚文化的西漸——楚国經營西部的考古学觀察』(四川出版集团巴蜀書社、二〇一〇年)。楊華『三峡遠古時代考古文化』(重慶出版社、二〇〇七年)。郭立新・夏寒『峡江地区古代族群互動与文化變遷』(科学出版社、

究を大いに乗り越える認識を得たのであった。本稿はこれまでの研究成果を総合し、現在までに獲得された考古学的発見から先秦時期の峡江地域における東西文化の交流状況について巨視的な整理を行い、読者へ提供するものである。

## — 「鋭稜砸撃法」の登場—— 旧石器時代

峡江地域は東アジア地域における旧石器時代の遺跡や古人類の化石が豊富に出土しており、旧石器時代早期から旧石器時代晩期までにかけての全ての時期を欠けることなく発掘できている。この地域で豊富に発見される古人類の化石は古人類の起源を探索するうえで非常に重要な意味を持つものだろう<sup>(3)</sup>。現在までに峡江地域で発見された旧石器時代早期の遺跡としては、〔重慶市〕巫山県の龍骨坡、〔重慶市〕豊都県の煙墩堡、〔湖北省宜昌市〕秭歸県の孫家棟などを挙げることができる。また旧石器中期の遺跡としては、豊都県の高家鎮、以下おなじく豊都県の冉家路口、井水湾、棗子坪、範家河、池壩嶺などがある。さらに旧石器晩期の遺跡としては、〔重慶市〕忠県の烏楊、〔重慶市〕雲陽県の大地坪などが存在する。

これまでの研究によって<sup>(4)</sup>、峡江地域では旧石器時代に明確な文化的共通性を持っていたことが分かっている。たとえば石器の原料を収集するにあたっては、その土地の状況に応じた対応をしており、材料を現地で調達している。おおむね附近の河川が上流よりもたらし豊富な河卵石〔河流で丸まった石、river-run gravel。日本では川砂利、河流礫などと呼称する〕を原料としていた。石器の打製方法は、錘撃法〔直接打法、hammering method〕、碰砧法〔台石打法〕、また摔碰法〔投擲法、Throwing against anvil technique〕（すなわち鋭稜砸撃法〔ridged-hammer bipolar flaking。砸撃法とはBipolar methodすなわち両極打法・双極打法を指す。それによって鋭角な先端部を作成する方法〕でもある）である。そして旧石器時代中期に至ると、この地域での石器の打製方法は主に摔碰法となり、この地域で最も特色ある剥片生成技術が形成された〔剥片flakeとは、原石（母岩）を打ち欠いてつくった薄いかけらを指す。原石は大きすぎ小石器をつくる上で不向きであり、剥片を製作した後にそれを素材として打製石器などをつくる場合が多い。これを特に剥片石器と呼ぶ〕。毛坯〔石器製造段階での半加工状態の剥片〕は主に片状毛坯〔半加工状態にする過程ではカタマリ状の塊状毛坯を好む技法とシャープな片状毛坯の技法といった傾向があらわれる〕を選択していた。加工技術はずっと硬錘法〔硬質ハンマーによる直接打撃法〕

二〇一〇年）。江章華「川東長江沿岸先秦考古学文化的初步分析」（『四川文物』二〇〇二年第五期）。鄒后曦・袁東山「重慶峡江地区的新石器文化」（『重慶二〇〇一—三峡文物保護學術研討會論文集』科学出版社、二〇〇三年）。白九江「從三峡地区的考古發見看楚文化的西進」（『江漢考古』二〇〇六年第一期）。余静「從近年來三峡考古新發見看楚文化的西漸」（『江漢考古』二〇〇五年第一期）。

<sup>(3)</sup> 武仙竹・裴樹文・鄒后曦・侯江・王運輔「中国山峡地区人類化石的發見与研究」（『考古』二〇〇九年第三期）。

<sup>(4)</sup> 高星・裴樹文『三峡遠古人類の足跡——峡江地区旧石器時代考古的發見与研究』（巴蜀書社、二〇一〇年）。

が用いられており、軟錘法〔軟質ハンマーによる直撃加工〕は見られない。道具は砍砸器〔斧〕と刮削器〔スクレイパー、物質の外表面をこそげとる刃状・ヘラ状の器具〕で、晩期になると刮削器が主要な地位を占めた。

全体から見ると、旧石器時代、峡江地域の東西には明確な相違は無く、全て中国南方に共通する旧石器時代の礫石石器〔graveltool、礫石器とも〕の製作系統に属していたものであると思われる。ただ晩期になると刮削器が増加し、小型の道具が比較的多くなっていく。あるいはこれは華北地域の旧石器時代の製作系統との文化交流の結果であるのかもしれない。

鋭稜砸撃法〔鋭角両極打法〕は、峡江地域の新石器時代の石器打製方法のなかで最も特色あふれる方法であり、この地域の打製石器の象徴的ともいえる技術である。この技術は峡江地域にいつ頃誕生したのであろうか。この地域のこの技術は、旧石器時代中期に遡ることが出来るものであろうか。この技術はこの地域で独自に発生したものなのであろうか。学界ではこれら諸問題について多くの意見が出されている。例えば余西雲氏は旧石器時代から峡江地域で発展したものなどではなく、あくまで外来の技術だとしている<sup>(5)</sup>。李英華氏の研究では、この種の技術は最早期のものとして貴州省〔六盤水市水城県の〕硝灰洞、〔貴州省遵義市普定県の〕白岩脚洞、〔貴州省黔西南布依族苗族自治州興義市の〕猫猫洞や川洞などといった更新世〔Pleistocene、地質時代の区分の一つで、約258万年前から約1万年前までの期間。その時代のほとんどは氷河時代であった〕の晩期の遺物から見られるもので〔湖南省常德市澧県の彭頭山遺跡で発見され文化類型となった〕彭頭山文化でも発見されているという<sup>(6)</sup>。もしこの研究が確かであるとすれば、峡江地域のこの技術は東から西に伝播したものと考えることができよう。

## 二 「釜文化」の形成と発展——新石器時代中早期

およそ紀元前5600年から紀元前5000年ごろ、〔湖北省の〕江漢平原の西辺部は〔湖北省宜昌市宜都市の城背溪遺跡から発掘され文化類型となった〕城背溪文化が独占状態にあった。城背溪文化は陶器が〔焼成のあいだに陶器が破裂しないように細砂や石屑あるいは炭を混ぜる〕夾炭の陶器が主であり、一部に〔細砂を混ぜた〕夾砂の陶器と〔中砂性粘土そのままの〕泥質の陶器がある。陶器の表面色は赤や黒であるが、主には紅褐色である。陶器の多くには紋様があり、縄紋が主である。器物はおおむね圈底〔丸底〕である。いくつかは〔円状の足のつく〕圈足器であるが、だいたい〔口がすぼまり丸底の〕束口圜底釜、罐、〔容器部分の浅い丸底の〕浅腹圜底盤、〔湾曲した台である〕弯身支座、そして圈

<sup>(5)</sup> 余西雲『巴史——以三峡考古為証』（科学出版社、二〇一〇年）。

<sup>(6)</sup> 李英華・余西雲・侯重梅「關於三峡地区石器工業中的鋭稜砸撃製品」（『第十届中国古脊椎動物学術年會論文集』海洋出版社、二〇〇六年）。

足盆といったものである。これまでの研究からすると、この文化は洞庭湖地域の彭頭山に分布したものが北にむかって発展・進化したものである。現在の考古資料から判断すると、城背溪文化が西側の峡江地域に向かって進出したものと、関中の陝南地域にある〔陝西省漢中市西郷県の李家村遺跡から発掘され文化類型となった〕李家村文化とが会って一つの新しい考古文化、すなわち〔湖北省恩施土家族苗族自治州巴東県の楠木園遺跡で発掘され文化類型となった〕楠木園文化が形成された。この文化の典型的遺跡は陝西〔三峡地域西武〕の〔重慶市〕豊都県の玉溪<sup>(7)</sup>と峡東〔三峡東部〕の巴東県の楠木園である。この二つの遺跡の陶器は夾砂の陶器が主であり、色は紅褐色で、文様はおおむね縄紋である。器類は圈底〔丸底〕で、圈底釜、罐、〔円状の足がついているように見えながら実は足部が容器の一部となっている〕仮圈足碗、圈足碗、圈底鉢が主である。石器の打製方法はおおむね鋭稜砸撃法〔鋭角両極打法〕と錘撃法〔直接打法、hammering method〕である。二つの遺跡には若干の相違点があり、玉溪遺跡には楠木園遺跡にある支座〔台〕の器物が存在せず、楠木園には玉溪遺跡にある〔口がめくれあがるように広がる〕敞口大盆がないといった相違がある。そのため、学者によっては陝西地域のこの時期の遺跡は独立した玉溪下層文化と命名すべきだとさえ主張する<sup>(8)</sup>。

現在の考古的発見から見ると、陝西地域では打製石器を特色とする新石器時代の早期遺跡が複数発見されている。例えば〔重慶市〕奉節県の三坨<sup>(9)</sup>、横路<sup>(10)</sup>、〔重慶市〕万州区の武陵、〔おなじく万州区の〕炳泉院子<sup>(11)</sup>、〔重慶市〕奉都県の老鷹嘴や和平村<sup>(12)</sup>、〔重慶市〕奉節県の魚腹浦<sup>(13)</sup>や藕塘<sup>(14)</sup>等である。そのうち魚腹浦、藕塘では陶器が発見されている。総体として見れば、これらの遺跡には石器の高い製作技術があり、一部の陶器は原料や制作方法そして器類としての形式がみな峡東地域の城背溪文化や楠木園文化の器類と相似しており、いわば一つの大きな「釜文化」の系統に属するものであり、峡江地域の新石器文化はおそらく外来の文化が東部から進入したもので、この地の旧石器文化が独自に展開した結果ではないと考えられよう。

<sup>(7)</sup> 重慶市文物考古所「豊都玉溪遺址発掘簡報」（『重慶庫区考古報告集（一九九九卷）』科学出版社、二〇〇六年）。鄒后曦・袁東山「重慶峡江地区の新石器文化」（『重慶二〇〇一三峡文物保護學術研討會論文集』科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(8)</sup> 白九江『重慶地区の新石器文化——以三峡地区为中心』（四川出版集团巴蜀書社、二〇一〇年）。

<sup>(9)</sup> 中国科学院古脊椎動物与古人類研究所・重慶市文物局「奉節三坨遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇卷）』上冊、科学出版社、二〇〇七年）。

<sup>(10)</sup> 三峡旧石器時代考古工作隊「奉節横路遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。中国科学院古脊椎動物与古人類研究所・重慶市文物局・奉節県白帝城博物館「奉節横路遺址考古発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇卷）』上冊、科学出版社、二〇〇七年）。

<sup>(11)</sup> 福建省博物館等「万州炳泉院子遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇一卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

<sup>(12)</sup> 衛奇「三峡地区の旧石器」（『中国考古学的世紀回顧——旧石器時代考古卷』科学出版社、二〇〇四年）。

<sup>(13)</sup> 中国科学院古脊椎動物与古人類研究所等「奉節魚腹浦遺址旧石器時代考古発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九七卷）』科学出版社、二〇〇一年）。

<sup>(14)</sup> 山西大学考古学系等「重慶奉節藕塘新石器時代遺址」（『考古与文物』二〇〇九年第五期）。

これまでの研究によれば<sup>(15)</sup>、約紀元前 5000 年主に峡江東部に展開した文化は、峡東地域の城背溪文化が、洞庭湖西北の〔湖南省常德市安郷県で発掘された〕湯家岡文化の一部の要素を受容して、のちに〔湖北省宜昌市秭帰県で発掘された〕柳林溪文化へと発展したものとされる。その文化の典型的な遺跡が秭帰県の柳林溪<sup>(16)</sup>、秭帰県の朝天嘴<sup>(17)</sup>、宜昌市〔夷陵区の〕三斗坪<sup>(18)</sup>、宜昌〔夷陵区の〕楊家湾<sup>(19)</sup>、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の店子頭<sup>(20)</sup>、〔重慶市〕巫山県の大溪<sup>(21)</sup>などである。その文化の陶器は夾砂の紅色陶器が主であり、紋様はおおむね縄紋で、器類は主に円底であり、典型的な器物は〔まっすぐの円柱状の台座である〕直身円柱支座、弯身支座、圓底釜、〔盆のような口が発達する〕盆口罐、圓底鉢、平底鉢、假圈足碗、圈足碗等である。この文化は主に瞿塘峡から西陵峡までの三峡全域に分布している〔長江三峡とは上流からみて白帝城から巫山県大溪までの瞿塘峡、巫山から巴東県官渡口までの巫峡、秭帰から宜昌市夷陵区南津関までの西陵峡の三つの峡谷の総称であり、ここではその三峡すべてに分布していることを示す〕。

白九江氏は玉溪遺跡の下層部を代表とするような文化は現在から 6300 年前まで継続したとしているが、この種の遺跡の公開資料はまだ少ないため、峡西〔三峡地域西部〕の楠木園文化がさらに遅くまで継承されていたかどうか、あるいは何がしかの部分が柳林溪文化と同じものであったのか、現在のところなお判断は難しい状況である。

およそ紀元前 4000 年ごろ、峡東地域〔三峡地域東部〕の柳林溪文化は〔重慶市巫山県で発掘された〕大溪文化へと発展した。その文化の典型的な遺跡は巫山県の大溪<sup>(22)</sup>、〔湖北省〕宜昌市〔夷陵区〕の中堡島<sup>(23)</sup>、〔湖北省〕宜昌市〔夷陵区の〕三斗坪鎮にある〕清水灘<sup>(24)</sup>、〔宜昌市の〕秭帰県の何家坪<sup>(25)</sup>、台丘<sup>(26)</sup>、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の

(15) 羅運兵「試論柳林溪文化」（『二〇〇三三峡文物保護与考古学研究學術研討會論文集』科学出版社、二〇〇三年）。

(16) 王鳳竹・周国平主編『秭帰柳林溪』（科学出版社、二〇〇三年）。

(17) 国家文物局三峡考古隊『朝天嘴与中宝島』（文物出版社、二〇〇一年）。

(18) 湖北省文物考古研究所「一九八五—一九八六年三峡壩区三斗坪遺址発掘簡報」（『江漢考古』一九九九年第二期）。

(19) 宜昌地区博物館「宜昌楊家湾新石器時代遺址」（『江漢考古』一九八四年第四期）。

(20) 湖北省文物考古研究所「巴東店子頭遺址発掘簡報」（『江漢考古』二〇〇四年第三期）。

(21) 重慶市文物考古所等「巫山大溪遺址勘探発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇卷）』科学出版社、二〇〇七年）。鄒后曦・白九江「巫山大溪遺址歴次発掘与分期」（『重慶二〇〇一三峡文物保護學術研討會論文集』科学出版社、二〇〇三年）。

(22) 四川省博物館「巫山大溪遺址第三次発掘」（『考古学報』一九八一年第四期）。重慶市文物考古所等「巫山大溪遺址勘探発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

(23) 国家文物局三峡考古隊『朝天嘴与中宝島』（文物出版社、二〇〇一年）。

(24) 湖北省宜昌地区博物館等「湖北省宜昌県清水灘新石器時代遺址の発掘」（『考古与文物』一九八三年第二期）。武漢大学歴史系考古專業「清水灘遺址一九八四年発掘簡報」（『江漢考古』一九八八年第三期）。

(25) 湖北省文物考古研究所「秭帰何家坪遺址発掘簡報」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

(26) 天津市歴史博物館考古部「秭帰台丘遺址発掘報告」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

楠木園、〔重慶市〕巫山県の培石<sup>(27)</sup>などである。その文化の陶器は泥質と夾砂が主で、陶色はおおむね紅色、紋様は無紋であり、器形は圈足器や圜底器で、その種類は釜・罐・圈足盆・碗・缸・盆・鉢・〔ふたと脚がついて豆の字に似る古代の食器である〕豆・杯・壺・器座・支座などである。大溪文化は西に向かって分布しており、〔文化そのものは〕基本的に〔三峡最西部の〕瞿塘峡を越えることはなかったが、その影響は峡西地域まで及んだ。峡西地域の〔重慶市豊都県の〕玉溪坪文化には〔焼成前に紅色の粘土を衣として付加した〕飾紅陶衣の〔口がすぼまる〕斂口鉢などの大溪文化の器物が存在している。大溪文化は「釜文化」が発展した全盛期にあたるのである。

大溪文化も晩期になると、東の〔湖北省荊門市京山県の屈家嶺遺跡で発掘され文化類型となった〕屈家嶺文化の強烈な影響を受け、徐々にその文化は消失していき、一部の文化要素は屈家嶺文化に溶け込んでいった。

屈家嶺遺跡下層の文化は長江に沿って徐々に広がり、〔湖北省中央部の〕江漢平原の西部にやや単純な遺跡を残している。そして三峡に入ってから、徐々に大溪文化に溶け込んでいったのである。もちろん西に行くほど、大溪文化の比重が大きいことはいうまでもない。大溪文化の晩期には、ほとんどすべての遺跡でいささかの屈家嶺下層文化の要素が現われ、そこからは、例えば曲腹杯・圈足罐・圈足壺・高柄豆・簋等が出現した<sup>(28)</sup>。

およそ紀元前 2800 年、峡東地域の大溪文化が屈家嶺文化に溶け込んでいき、屈家嶺文化がこの地域を席卷する。典型的な遺跡は〔湖北省〕宜昌市〔夷陵区の〕中堡島、〔おなじく夷陵区の〕清水灘、〔宜昌市〕秭帰県の官庄坪<sup>(29)</sup>や倉坪<sup>(30)</sup>、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の茅寨子湾<sup>(31)</sup>や楠木園そして李家湾<sup>(32)</sup>、〔重慶市〕巫山県の大溪などである。屈家嶺文化は東から西に向かって徐々に峡江地域へ浸透していった。峡東地域では幾つかの典型的な屈家嶺文化の墓葬が存在し、例えば宜昌市〔夷陵区覃家沱の〕白獅湾 M4 墓がそれであり<sup>(33)</sup>、おそらく屈家嶺文化の人間が直接進出したことを表している。屈家嶺文化は〔重慶市忠県の〕哨棚嘴遺跡にまで伝播し、ここでも屈家嶺文化に属する彩陶壺が発見されるにいたった。

<sup>(27)</sup> 南京博物院考古部「巫山培石遺址第一次発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九九卷）』科学出版社、二〇〇六年）。南京博物院考古部「巫山培石遺址第二次発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（2000 卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

<sup>(28)</sup> 余西雲『巴史——以三峡考古為証』（科学出版社、二〇一〇年）七七頁。

<sup>(29)</sup> 国務院三峡工程建設委員会辦公室・国家文物局編著『秭帰官庄坪』（科学出版社、二〇〇五年）。

<sup>(30)</sup> 南京大学歴史学系考古教研室「秭帰倉坪遺址発掘報告」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(31)</sup> 国家文物局三峡文物保護領導小組湖北工作站等「湖北巴東茅寨子湾遺址発掘報告」（『考古学報』二〇〇一年第三期）。湖北省文物考古研究所「湖北巴東茅寨子湾遺址第二次発掘」（『湖北庫区考古報告集（第三卷）』科学出版社、二〇〇六年）。

<sup>(32)</sup> 馮小波主編『巴東李家湾』（科学出版社、二〇〇九年）。

<sup>(33)</sup> 湖北省文物考古研究所「長江三峡工程壩区白獅湾遺址発掘簡報」（『三峡考古之発見』第二冊、湖北科学技术出版社、二〇〇〇年）。

鄂西地域〔湖北省西部〕においては、屈家嶺文化について〔湖北省の省直轄県級行政区である天門市の石家河遺跡より出土し文化類型となった〕石家河文化が起こったが、石家河文化の峡東地域に対する文化浸透度は屈家嶺文化よりも弱く、峡東地域に石家河文化の典型的な遺跡はなく、よしんば石家河文化の要素があってもその殆どが他の文化要素と共存しているため、峡西地域で石家河文化だけによる影響は殆ど見られない。

ただ、屈家嶺文化が峡東地域に拡大し、以降〔湖北省宜昌市夷陵区で発掘された殷の時代の〕路家河文化が成立するまで、「釜文化」の発展は絶対的な阻害を受け、長きにわたって低迷してしまう。そしてあくまで屈家嶺文化の補助的な成分となってしまったのである。峡東地域の「釜文化」は西から東に向かうほどに阻害の程度が高くなる。とはいえ「釜文化」は屈家嶺文化とそれに続く石家河文化の阻害を受けて低迷しはしたものの、あくまで継続し、中断には到らなかった。これはのちの路家河文化で「釜文化」が中興するための基礎となったのである。屈家嶺文化と石家河文化の峡西地域に対する文化浸透が弱くなっていき、東から西への浸透が次第に衰えると、それと密接に関係するように峡西地域で「罐文化」が形成され発展し、東に向かって広がっていくことになる。

### 三 「罐文化」の形成と発展——新石器時代中晩期

おおよそ大溪文化の形成が完了したころ、峡西地域では一種の罐・瓶・鉢・盆を特色とする考古学的文化が出現した。これが玉溪坪文化である。白九江氏は玉溪坪文化の前に玉溪上層文化を想定した。これは現在の考古発見から見ると、「玉溪上層文化」と「玉溪坪文化」とでは陶器の材質、器類及び紋様の特徴の差異が少なく、石器の製作も似ていて、全体的に見ると、器物群の特徴の差異は比較的小さい。我々もこの二つが同種の考古学文化、つまり玉溪坪文化であるとする意見に賛同している。その文化の主な遺跡は〔重慶市〕豊都県の玉溪、〔重慶市〕忠県の哨棚嘴<sup>(34)</sup>、おなじく忠県の瓦渣地<sup>(35)</sup>、杜家院子<sup>(36)</sup>、〔重慶市〕万州区の蘇和坪<sup>(37)</sup>、涪溪口<sup>(38)</sup>などである。その文化の陶器は主として夾砂の陶器で、色は

<sup>(34)</sup> 北京大学考古文博院三峡考古隊等「忠県・井溝遺址群哨棚嘴遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。北京大学考古研究中心等「忠県哨棚嘴遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

<sup>(35)</sup> 北京大学考古系三峡考古隊等「忠県瓦渣地遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(36)</sup> 成都市文物考古研究所等「忠県杜家院子遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(37)</sup> 重慶市博物館等「万州蘇和坪遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。重慶市文物考古所等「万州蘇和坪遺址第二次発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(38)</sup> 福建省考古隊等「万州涪溪口遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。福建省考古隊等「万州涪溪口遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。福建省考古隊等「万州涪溪口遺址第三次発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』

紅褐色と赤が多い。陶器の大部分には紋様があり、線紋や縄紋が流行している。そして多数の器物は〔格子模様である〕稜格紋と〔タガをはめたように見える横線の〕箍帯紋により形成された複合的な紋様をもつ。器類はおおむね花辺口折沿瘦腹罐・卷沿鼓腹罐・小口平底瓶・内折沿鉢・翻折沿盆・厚胎缸等である。現在の考古学的発見から見ると、玉溪坪文化と玉溪下層文化を代表とする遺跡には継承関係がなく、中原の仰韶文化が浸透した結果である。その文化が形成されたのち、大溪文化に一定の影響を与え、さらに峡東地域の屈家嶺文化に重要な影響を与え、巴東県の楠木園、茅寨子湾、李家湾、秭帰県の黄土嘴<sup>(39)</sup>、宜昌市〔夷陵区の〕中堡島などの遺跡で、花辺口折沿瘦腹罐・卷沿鼓腹罐・小口平底瓶・内折沿鉢等の典型的な玉溪坪文化遺物が発見された。そこから見ると、屈家嶺文化の時期とは、つまり玉溪坪文化が東へ伝播した時期にあたる。

およそ紀元前 2200 年、玉溪坪文化が中壩文化へと発展した。典型的な遺跡が〔重慶市〕忠県の中壩<sup>(40)</sup>、哨棚嘴、杜家院子、瓦渣地、〔重慶市〕豊都県の玉溪坪、〔重慶市〕万州区の黄柏溪<sup>(41)</sup>、〔重慶市〕奉節県の老関廟<sup>(42)</sup>、〔重慶市〕巫山県の鎖龍<sup>(43)</sup>、大溪などである。その文化は〔三峡西部である〕瞿塘峡より西の峡西地域に主として分布していた。その陶器は夾砂の陶器が主であり、陶色は早期には灰陶であるが晩期にかけて紅褐陶が主となり、紋様は縄紋を相互に交差させる〔菱形で格子状となる〕菱格紋が多い。器類は主に大口缸・盆口罐で、ほかにまた折沿罐・卷沿罐・高領罐・鉢・器蓋等がある。

石家河文化の衰亡に続き、北方の〔河南省汝州市の煤山遺跡で発掘された文化類型の〕煤山文化が鄂西峡東地域に浸透し、〔湖北省宜昌市宜都市の〕石板巷子文化が形成された。代表的な遺跡は宜都市の石板巷子、茶店子、王家渡、蔣家橋などとなる<sup>(44)</sup>。陶器で一番多いのは泥質の陶器で、その次が夾砂の陶器である。陶色は灰陶と黒陶とが多い。基本的な紋様は〔正方形の格子模様である〕方格紋と〔打ち寄せる波のような〕藍紋である。器形

科学出版社、二〇〇六年)。

<sup>(39)</sup> 湖北省文物考古研究所「秭帰黄土嘴遺址考古発掘簡報」(『湖北庫区考古報告集』第二卷、科学出版社、二〇〇五年)。

<sup>(40)</sup> 四川省文物考古研究所等「忠県中壩遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。四川省文物考古研究所等「忠県中壩遺 II 区発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。四川省文物考古研究所等「忠県中壩遺址一九九九年度発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(41)</sup> 重慶市博物館等「万州黄柏溪遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。重慶市文化局等「万州黄柏溪遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

<sup>(42)</sup> 吉林大学考古学系「四川奉節老関廟遺址第一・二次発掘」(『江漢考古』一九九九年第三期)。吉林大学考古学系等「奉節老関廟遺址第三次発掘」(『四川考古報告集』文物出版社、一九九八年)。

<sup>(43)</sup> 成都市文物考古工作隊等「巫山鎖龍遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。成都市文物考古工作隊等「巫山鎖龍遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(44)</sup> 宜都考古発掘隊「湖北宜都石板巷子新石器時代遺址」(『考古』一九八五年第十一期)。湖北省文物考古研究所「宜都城背溪」(文物出版社、二〇〇一年)。

は鼎・釜・高領鼓腹罐・深腹罐・甕・豆・皿・杯・器のフタが多い。

中壩文化が峡西地域で形成され、のちに東へ浸透していき、石板巷子文化の要素が西に伝わり、二者の相互作用によって、峡東地域で新しい考古文化、すなわち〔湖北省宜昌市夷陵區で発掘された〕白廟文化が形成された。主な遺跡は宜昌市〔夷陵區の〕白廟<sup>(45)</sup>、大坪<sup>(46)</sup>、〔宜昌市〕秭歸県の柳林溪、廟坪、官庄坪などとなる。陶器はおおむね夾砂の陶器で、褐陶の数が多い。また無紋器も多いが、紋様があればそれはおおむね縄紋と方格紋などである。器類は深腹罐の数が一番多く、また甕・鼎・碗・豆・器のフタ等がある。これまで多くの学者が白廟文化と石板巷子遺跡を同じ考古文化に分類してきたが、于孟洲氏は「石板巷子の遺物の炊器は鼎と釜を主としているのに対して、白廟の遺物は深腹罐が主であって鼎と釜の数はとても少ない」と指摘した。この指摘から考えると、白廟遺跡と石板巷子遺跡との弁別には道理がある。とすれば、当時の中壩文化の東への浸透、また石板巷子の文化の西への浸透といった現象があったことを大きく反映するものであったといえよう。なお、石板巷子文化と比較すれば、白廟文化では「罐文化」の伝統が優勢である。

総体として見ると、峡西地域では罐を特色とする玉溪坪文化が発生し、そして「罐文化」の伝統は徐々に東へ浸透、峡東地域の「釜文化」の系統と争った。そして白廟文化の時期に至って、峡江東部地域は基本的に「罐文化」の系統に入ったのである。ただし、峡東地域から東に向かえば向かうほど、「罐文化」の特徴は弱くなっていき、かわって「釜文化」の系統は強くなっていく。そして「罐文化」の系統が中壩文化の時期に全盛期となると、その後に三星堆文化が峡江地域へ広がり浸透してくる。ここで峡東地域では〔湖北章秭歸県茅坪鎮の朝天嘴遺跡で発掘された〕朝天嘴文化が出現し、峡西地域では〔重慶市万州区中壩子で発掘された〕中壩子文化が出現した。この二つの考古文化でも「罐文化」は継続していたものの、もはや峡江地域に特徴的な文化伝統ではなくなったのであった。

#### 四 三星堆文化の東への広がり —— 夏商時代

夏代の晩期には、〔四川省成都市新津県で発掘された〕宝墩文化から発展した〔四川省徳陽市広漢市で発掘された〕三星堆文化が東に向かって大規模に広がって浸透していく。そのなかで峡西地域の中壩文化は中壩子文化へと発展したのである。典型的な遺跡として

<sup>(45)</sup> 湖北宜昌地区博物館等「湖北宜昌白廟遺址試掘簡報」（『考古』一九八三年第五期）。三峡考古隊「湖北宜昌白廟遺址一九九三年発掘簡報」（『江漢考古』一九九四年第一期）。

<sup>(46)</sup> 三峡考古隊「宜昌大坪遺址発掘簡報」（『江漢考古』一九九四年第一期）。

〔重慶市〕万州区の中壩子<sup>(47)</sup>、巴豆林<sup>(48)</sup>、〔重慶市〕雲陽県の伍家湾<sup>(49)</sup>、〔重慶市〕忠県の老鴉沖<sup>(50)</sup>、哨棚嘴、中壩、〔重慶市〕涪陵区の蘭市<sup>(51)</sup>などがある。

この文化の陶器は夾砂の陶器を主としており、陶器の色は混ざり合ったような色であるが、多くは紅褐色や灰色の陶器である。陶器は無紋のものが多く、紋様があれば縄文が主である。陶器の種類は、深腹罐・小平底罐・灯形器・器蓋・尖底杯・豆・觚・鳥頭把勺などである。そのうち、小平底罐・灯形器・鳥頭把勺・器蓋は典型的な三星堆文化の要素を持ち、中壩子文化の中でも数が多い。深腹罐・尖底杯などの陶器の紋様のついた縁取りは中壩文化の伝統を継承しているけれども、この伝統は三星堆の文化要素には及ばない。ここから見ると、三星堆文化は峡江地域の罐文化の伝統に対して深い影響を与えた。

三星堆文化の峡西地域の文化に対する浸透は峡江地域へのそれよりも遥かに深い。三星堆文化の浸透によって、峡東地域の白廟文化は朝天嘴文化へと変化した。典型的な遺跡としては、朝天嘴、何光嘴<sup>(52)</sup>、宜昌中堡島、巴東楠木園などがある。この文化の陶器は夾砂黒皮褐胎陶を主とする。陶器は無紋で、部分的に磨かれていた。紋様は縄文を主とする。陶器の種類は、小平底罐・灯形器・鳥頭把勺・深腹罐・浅腹罐・大口缸・鬻・盃などがある。そのうち、小平底罐・灯形器・豆・鳥頭把勺・器蓋が典型的な三星堆文化の構成要素であり、数が一番多く、重要な位置を占める。深腹罐・浅腹罐・矮領甕などの文化要素はその淵源をこの地に存在した以前の白廟文化に求めることができ、数量も多く、また重要な位置を占めている。総体的に見れば、この地域で保持された「罐文化」の伝統は中壩子文化よりも強いといえよう。とはいえ三星堆文化が朝天嘴文化へ与えた影響もまた依然としてとても深刻なもので、「罐文化」の伝統の継続と発展へ混乱をきたすこととなった。

三星堆文化はあたかも台風のように西から東へ峡江全域を席卷し、台風の中心部ともいえる〔四川省中央部の〕成都平原に近い地域に近ければ近いほど文化的浸透力も強く、三星堆文化の要素は色濃く反映されている。三星堆文化というその台風は、峡江全域を席卷するだけでなく、鄂西地域〔湖北省西部〕にまで影響を及ぼすこととなった。例えば、〔湖

<sup>(47)</sup> 西北大学考古隊等「万州中壩子遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。西北大学考古隊等「万州中壩子遺址東周時期墓葬発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇一年)。西北大学考古隊等「万州中壩子遺跡第三次発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。西北大学考古隊等「万州中壩子遺跡第四次発掘簡報」(『文博』二〇〇二年第三期)。

<sup>(48)</sup> 重慶市文物考古研究所等「万州巴豆林遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(49)</sup> 内蒙古文物考古研究所等「雲陽伍家湾遺址二〇〇一年度発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(50)</sup> 重慶市文物考古研究所等「忠県老鴉沖遺址(居址部分)発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(51)</sup> 重慶市文物考古研究所等「涪陵蘭市遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

<sup>(52)</sup> 張万高編集『秭婦何光嘴』(科学出版社、二〇〇三年)。

北省荆州市の〕荆南寺の遺跡<sup>(53)</sup>では小平底罐・灯形器・高柄杯・凸肩杯・器蓋などの三星堆文化の要素が発見されている。

総体からみれば、三星堆文化は峡江地域の文化に深く浸透していき、この地域の「罐文化」が途絶したわけではないものの、「罐文化」の伝統を継承するうえで大きな混乱が発生したのである。三星堆文化の到来により「罐文化」の地位は第二位に退くこととなり、以降は当地での文化的発展の主導権を握ることはなかったのである。

〔東からきた〕屈家嶺文化が西の峡江地域に入って以降、峡江地域の新石器時代の初期および中期から栄えていた「釜文化」の伝統は大きく阻害され、「釜文化」の伝統は低迷していくこととなった。その後、〔さらに西からきた〕三星堆文化は東の峡江地域に入って、一層「釜文化」の伝統の継承や発展に混乱をもたらした。しかし、「釜文化」の伝統はそれでも途絶することはなく、であればこそ三星堆文化が峡江地域から薄れていくにしたがって、「釜文化」が峡江地域で復興する可能性を残しえたのである。そして殷代も末期になると、「釜文化」を特色とする路家河文化が形成され、隆盛を誇ったのであった。

## 五 「釜文化」の復興と西への移動——商の晩期から春秋早期まで

殷の末期には、峡東地域の朝天嘴文化は路家河文化へと発展した。典型的な遺跡としては、〔湖北省〕宜昌市〔夷陵区の〕路家河<sup>(54)</sup>、鹿角包<sup>(55)</sup>、三斗坪<sup>(56)</sup>、楊家嘴<sup>(57)</sup>、〔湖北省宜昌市の〕秭帰県の柳林谿、廟坪、卜莊河<sup>(58)</sup>、長府沱<sup>(59)</sup>、渡口<sup>(60)</sup>、王家壩<sup>(61)</sup>、何家大溝<sup>(62)</sup>、石門嘴<sup>(63)</sup>、何光嘴、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の茅寨子湾、鴨子嘴<sup>(64)</sup>、楠木園、奉節新浦<sup>(65)</sup>、〔重慶市〕万州区の蘇和坪などがある。この文化の陶器は夾砂の褐陶が主で

<sup>(53)</sup> 何弩「荆南寺遺址夏商時期依存分析」（『考古学研究』第二冊、北京大学出版社、一九九四年）。

<sup>(54)</sup> 長江水利委員会『宜昌路家河——長江三峡考古発掘報告』（科学出版社、二〇〇二年）。

<sup>(55)</sup> 湖北省文物考古研究所三峡考古隊「湖北宜昌市鹿角包遺址発掘簡報」（『考古』二〇〇二年第七期）。

<sup>(56)</sup> 湖北省文物考古研究所「一九八五——一九八六年三峡壩区三斗坪遺址発掘簡報」（『三峡考古之発見』第二冊、湖北科学技術出版社、二〇〇〇年）。

<sup>(57)</sup> 三峡考古隊第三小組「湖北宜昌楊家嘴遺址発掘」（『江汉考古』一九九四年第一期）。

<sup>(58)</sup> 盧德佩・王志琦編集『秭帰卜莊河』（科学出版社、二〇〇八年）。

<sup>(59)</sup> 宜昌市博物館「三峡庫秭帰長府沱商代遺址発掘」（『三峡考古之発見』第二冊、湖北科学技術出版社、二〇〇〇年）。宜昌市博物館「秭帰長府沱商代遺址発掘簡報」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(60)</sup> 宜昌市博物館「秭帰渡口遺址発掘簡報」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(61)</sup> 湖北省文物考古研究所「秭帰王家壩遺址発掘簡報」（『湖北庫区考古報告集（第一卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(62)</sup> 広東省文物考古研究所「秭帰何家大溝遺址の発掘」（『湖北庫区考古報告集（第三卷）』科学出版社、二〇〇六年）。

<sup>(63)</sup> 吉林大学边疆考古研究中心等「湖北秭帰石門嘴遺址発掘」（『考古学報』二〇〇四年第四期）。

<sup>(64)</sup> 湖北省文物考古研究所「巴東鴨子嘴遺址（西区）発掘簡報」（『湖北庫区考古報告集（第二卷）』科学出版社、二〇〇五年）。

<sup>(65)</sup> 吉林大学考古学系「四川奉節新浦遺址発掘報告」（『考古』一九九九年第一期）。吉林大学考古学系等「奉

あり、大部分は縄文である。陶器の形はおおむね圓底器で、主なものは釜である。それ以外に、小平底罐・灯形器・大口缸・深腹罐、高領罐・簋・豆などの陶器も存在する。路家河文化の特徴はなによりも釜の数が多きことにある。路家河遺跡でこの文化に属する路家河遺跡の第二期にあたる夾砂の褐陶の釜（釜のような形の小さい罐も含む）は総数が63.53%を占めるほどである。

路家河文化は釜文化が復興した時期にあたる。三星堆文化が西に縮退するにしたがって、路家河文化が形成され、そののち西に浸透し、典型的な路家河文化遺跡は〔長江三峡の西部にあたる〕瞿塘峡を超えて、峡西地域に入った。はなはだしい事例では遠く〔重慶市豊都県の〕石地壩遺跡にすら路家河文化の典型的な要素である縄紋釜・方格紋釜・鼓肩罐・盆などを見ることができる。

路家河文化が西へ広がり浸透するなかで、峡西地域の中壩子文化は石地壩文化へと変成した。典型的な遺跡は、〔重慶市〕豊都県の石地壩<sup>(66)</sup>、〔重慶市〕忠県の哨棚嘴、鄧家沱<sup>(67)</sup>、〔重慶市〕涪陵区の鎮安<sup>(68)</sup>、石沱<sup>(69)</sup>、蘭市などである。この文化の陶器は夾砂の陶器が泥質の陶器より若干多く、陶器の色は「斑駁不純」〔ある色のなかに別の色が混ざりこみマダラになっている〕である。泥質陶は〔表層を黒色粘土で覆って焼成する〕黒皮陶が多い。紋様は縄文と方格紋が主である。陶器の種類は小平底罐・尖底器・釜・高領罐・大口缸などが主である。そのうち路家河文化に属する釜や大口缸の数が多く、路家河文化がこの文化に深い影響を及ぼしていることが分かる。

おおよそ春秋中晩期になると、峡西地域の石地壩文化は瓦渣地文化に発展した。典型的な遺跡としては、〔重慶市〕忠県の瓦渣地、中壩、哨棚嘴、〔重慶市〕豊都県の石地壩、玉

節新浦遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（一九九七巻）』科学出版社、二〇〇一年）。吉林大学考古学系等「奉節新浦遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（一九九八巻）』科学出版社、二〇〇一年）。吉林大学考古学系等「奉節新浦遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（一九九九巻）』科学出版社、二〇〇六年）。吉林大学边疆考古研究中心等「奉節新浦遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇巻）』科学出版社、二〇〇七年）。吉林大学边疆考古研究中心等「奉節新浦遺址二〇〇一年発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇一卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

<sup>(66)</sup> 四川省文物考古研究所「豊都県三峡工程淹没区調査報告』（『四川考古報告集』文物出版社、一九九六年）。重慶市文物考古研究所等「豊都石地壩遺址商周時期遺存発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（一九九九巻）』科学出版社、二〇〇六年）。重慶市文物考古研究所等「豊都石地壩遺址発掘簡報』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇一卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

<sup>(67)</sup> 李鋒「忠県鄧家沱遺址西周時期文化遺存的初歩認識」（『重慶二〇〇一三峡文物保護學術研討會論文集』、科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(68)</sup> 北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（一九九八巻）』科学出版社、二〇〇三年）。北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（一九九九巻）』科学出版社、二〇〇六年）。北京市文物研究所等「二〇〇一・二〇〇三年度涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇一卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

<sup>(69)</sup> 北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（一九九七巻）』科学出版社、二〇〇一年）。北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（一九九八巻）』科学出版社、二〇〇三年）。北京市文物研究所三峡考古隊等「涪陵鎮安遺址発掘報告』（『重慶庫区考古報告集（二〇〇〇巻）』科学出版社、二〇〇七年）。

溪、〔重慶市〕万州区の麻柳沱<sup>(70)</sup>、巴豆林、大坪<sup>(71)</sup>、黄陵嘴<sup>(72)</sup>、〔重慶市〕雲陽県の李家壩<sup>(73)</sup>、〔重慶市〕奉節県の老油坊などがある。この文化は主として奉節県の西の峡西地域に分布している。陶器は夾砂の陶器が主であり、色は紅褐色が多い。紋様はおおむね縄文である。器類は〔紋様のついた縁取りの〕花辺口圜底釜・〔縁取りの無い〕素縁口圜底釜・角状尖底杯などである。これは石地壩文化から継承された要素である。ただ同時にこの文化の中には一定量の柱足陶鬲や甗など楚文化の要素もあった。すなわち明らかに楚文化と巴文化は峡西地域で共存していたのである。考古発見から見ると、東に近ければ近いほど、楚文化の要素も濃くなる傾向にある。

総体的に見れば、この時期に釜を主な特徴とする路家河文化が形成され、西に向かって文化が浸透していき、石地壩文化へと痕跡が残された。路家河文化は峡西地域を經由して西の成都平原へと浸透していった。路家河文化が流入したことで、成都平原の三星堆文化は〔四川省成都市青羊区で発掘された〕十二橋文化へと発展した。しかも路家河文化はこうして西に向かって文化を浸透させただけでなく、北の地域にも文化を強く浸透させていった。というのも陝南地域〔陝西省南部〕では路家河文化と密接に関係がある〔陝西省漢中市城固県から発掘された〕宝山文化が形成されており、ある学者は宝山文化が路家河文化と同種の文化であったとすら言うのである。路家河文化が興起してから鬲を特色とする周王朝時代の文化（楚文化）が流入するまで、峡西地域は「釜文化」が分布する地域となり、「釜文化」は再び峡西地域の最も際立った文化的象徴となり、さらには巴人のシンボルともなったのである。

## 六 廟坪類型文化の興起と楚文化の西伝——西周晩期から戦国まで

おおむね西周の中期から晩期にあたるころ、峡東地域には新しい考古文化、すなわち〔湖北省宜昌市秭帰県に発掘された〕廟坪系の文化が興起した。この種類の遺跡として、おも

<sup>(70)</sup> 上海大学文物考古研究中心等「万州麻柳沱遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。重慶市博物館等「万州麻柳沱遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(71)</sup> 盛定国編集『万州大坪墓地』(科学出版社、二〇〇六年)。

<sup>(72)</sup> 広西壮族自治区文物工作隊等「万州黄陵嘴遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(73)</sup> 四川聯合大学歴史考古專業「一九九四—一九九五四川雲陽李家壩遺址の発掘」(『四川大学考古專業創建三十五周年記念文集』四川大学出版社、一九九八年)。四川大学歴史文化学院考古系等「雲陽李家壩東周墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。四川大学歴史文化学院考古系等「雲陽李家壩一〇号岩坑墓発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。四川大学歴史文化学院考古系等「雲陽李家壩巴人墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。四川大学歴史文化学院考古系等「雲陽李家壩遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

なものに〔重慶市〕巫山県の双堰塘<sup>(74)</sup>、〔湖北省恩施土家族苗族自治州の〕巴東県の黎家沱<sup>(75)</sup>、おなじく巴東県の雷家坪、〔湖北省宜昌市の〕秭帰県の廟坪<sup>(76)</sup>、官莊坪<sup>(77)</sup>、柳林溪<sup>(78)</sup>、何家坪<sup>(79)</sup>などが挙げられ、〔長江三峡の東部にあたる〕西陵峡の西段にある〔宜昌市秭帰県香溪鎮で長江に合流する〕香溪河の寛谷〔合流地点で峡谷がやや広くなる部分〕から〔重慶市巫山県で長江に合流する〕大寧河の寛谷までに集中的に分布している。これまで発見されたなかで最も西の遺跡は巫山県の双堰塘遺跡となる。この遺跡の陶器としては夾砂の陶器が最も多い。陶器の色は均一ではなく、赤褐色陶、灰褐陶、灰黒褐陶などが存在する。紋様は多様であるが、縄文、〔削って描き出す〕刻劃紋、〔粘土を付け足して描く〕附加堆紋などが主となる。陶器の種類は釜・鬲・豆・盆・鉢・簋・碗・尖底盃・疊・壺・甕・缸・彈丸・紡輪などがある。これらの遺跡のなかで最も目立つ特徴は、陶鬲の数が多いことである。柱足は楚の様式の鬲の典型的な特徴を示している。この他の豆や盆はみな楚文化の器物の組み合わせとなっている。これらの遺跡の中で、釜・花辺口罐、〔縁取りの無い円形の底の〕素縁圜底罐、〔腹部の膨らんだ底の尖った〕鼓腹尖底杯、〔細い底の〕小底罐、〔円形の底の〕圜底鉢などは、路家河文化の要素が継承されたものである。総合して見れば、この地域の遺跡は、西に行けばいくほど当地の伝統文化の要素が濃くなっていく。たとえば双堰塘遺跡では、地元の文化要素が一番重要な位置を占めている。研究者たちはこれらの遺跡が古代の夔国の文化遺跡であると考えている。これまでの発見から、西周の中期から晩期そして春秋早期にいたるまで、〔長江三峡の東部と中部にあたる〕西陵峡さらに巫峡の地域は全て「鬲文化」が分布した地域と考えることができよう。

総合的に見ると、廟坪系の文化の中で「釜文化」は依然として継承されたが、東方からの「鬲文化」の強い影響を受け、「釜文化」は峡東地域で第二の地位に退いていった。「釜文化」を典型的な特徴とする石地壩文化が峡西地域で興起したことを考慮すれば、峡江地区の「釜文化」はほぼ西周中晩期から始まる東の「鬲文化」によって排斥され、西に縮退していったのであろう。廟坪系文化の興起は峡江地域の「釜文化」の継承に間違いなく混乱をもたらし、「釜文化」が当地で発展していく上でまたも大きな影響を受けた。すなわち廟坪系文化の興起は疑いなく峡江地域における文明の発展過程を変えていった。

<sup>(74)</sup> 中国社会科学院考古研究所長江三峡考古隊等「巫山双堰塘遺址報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九七卷)』科学出版社、二〇〇一年)。中国社会科学院考古研究所長江三峡考古隊等「巫山双堰塘遺址報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

<sup>(75)</sup> 中山大学人類学系等「巴東黎家沱遺址二〇〇〇年度発掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第一卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(76)</sup> 孟華平・周国平編集『秭帰廟坪』(科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(77)</sup> 湖北省文物考古研究所「秭帰官莊坪遺址試掘簡報」(『江漢考古』一九八四年第三期)。

<sup>(78)</sup> 王鳳竹・周国平編集『秭帰柳林溪』(科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(79)</sup> 湖北省文物考古研究所「秭帰何家坪遺址発掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第一卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

宜昌市〔夷陵区〕路家河、朱家台<sup>(80)</sup>、〔宜昌市〕秭帰県の官荘坪、渡口、〔湖北省恩施土家族苗族自治州〕巴東宝塔河<sup>(81)</sup>、〔重慶市〕巫山県の塗家壩<sup>(82)</sup>、跳石<sup>(83)</sup>などの遺址から出土した遺物から見れば、それらの遺跡の出土文物は主として鬲・盂・罐・豆・鉢・盆・壺・甕・缸などである。その中の鬲・盂・豆・罐・盆・甕などは同時期の〔湖北省荊州市〕江陵県のあたりや〔その近傍で楚の都の郢の故城である〕紀南城周辺の器物に非常に似ている。この点から見れば、春秋中期の初め、典型的な楚文化は峡江地域に自らの文化範囲を広げ、湖北の西部地域を支配するだけではなく、戦国早期までに、瞿塘峡とその東の地域も支配下に組み込んでいったのである。楚文化はより西の地域に浸透していき、〔重慶市〕奉節県の新鋪遺跡<sup>(84)</sup>、老油坊<sup>(85)</sup>などの遺跡からは鬲・盆・豆・罐などの楚文化の要素が発見された。雲陽県の李家壩、旧県坪<sup>(86)</sup>などの遺跡でも少量の鬲・甗などの楚文化の要素が発見された。より西の〔重慶市〕万州区の麻柳沱遺跡<sup>(87)</sup>でも鬲・甗などの楚文化の要素が発見された。楚文化の要素は当地の文化に融合していった。〔重慶市〕万州区より以西の地域になると楚文化要素はほぼ見られなくなる。ただし、〔重慶市〕忠県の中壩遺跡、〔重慶市〕豊都県の玉溪坪遺跡、秦家院子遺跡にだけは、わずかに鬲足・暗紋陶豆・折沿盆・暗紋束頸膨腹甕などの楚文化に特徴的な陶器が発見されている。

現在までに峡江地域で数多くの戦国時代の墓葬が発見されているが、典型的なものとして、〔宜昌市〕秭帰県の官荘坪、卜荘河、何家大溝、〔湖北省恩施土家族苗族自治州〕巴

<sup>(80)</sup> 湖北省博物館三峡考古隊第三組「宜昌朱家台遺址試掘」（『江漢考古』一九八九年第二期）。

<sup>(81)</sup> 武漢大学考古学系等「巴東県宝塔河遺址東周遺存」（『江漢考古』二〇〇七年第一期）。

<sup>(82)</sup> 中山大学人類学系「巫山塗家壩遺址発掘報告」（『重慶庫区考古発掘報告集（二〇〇〇卷）』科学出版社、二〇〇七年）。

<sup>(83)</sup> 南京博物院考古研究所等「巫山跳石遺址発掘報告」（『重慶庫区考古発掘報告集（一九九七卷）』科学出版社、二〇〇一年）。南京博物院考古研究所等「巫山跳石遺址第二次発掘報告」（『重慶庫区考古発掘報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(84)</sup> 吉林大学考古学系等「奉節新鋪遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九七卷）』科学出版社、二〇〇一年）。吉林大学考古学系等「奉節新鋪遺址発掘簡報」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。吉林大学考古学系等「奉節新鋪遺址発掘報告」（『三峡考古之発見』第二冊、湖北科学技术出版社、二〇〇〇年）。

<sup>(85)</sup> 吉林大学考古学系等「奉節老油坊遺址考古発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(86)</sup> 黒竜江省文物考古研究所等「雲陽県旧県坪遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

<sup>(87)</sup> 上海大学文物考古研究中心等「万州麻柳沱遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九七卷）』科学出版社、二〇〇一年）。重慶市博物館等「万州麻柳沱遺址発掘報告」（『重慶庫区考古報告集（一九九八卷）』科学出版社、二〇〇三年）。

東県の宝塔河<sup>(88)</sup>、仁家坪<sup>(89)</sup>、〔重慶市の〕巫山県の高唐観<sup>(90)</sup>、瓦岡槽<sup>(91)</sup>、水田湾<sup>(92)</sup>、土城坂<sup>(93)</sup>、秀峰一中<sup>(94)</sup>、〔重慶市の〕奉節県の瞿塘関<sup>(95)</sup>、魚腹浦<sup>(96)</sup>、宝塔坪<sup>(97)</sup>、上関<sup>(98)</sup>、〔重慶市の〕雲陽県の李家壩、故陵<sup>(99)</sup>、馬沱<sup>(100)</sup>、馬糞沱<sup>(101)</sup>、〔重慶市の〕万州区の中壩子、大坪、〔重慶市の〕開県の余家壩<sup>(102)</sup>、〔重慶市の〕忠県の羅家橋<sup>(103)</sup>、崖脚<sup>(104)</sup>などがある。これらの発見から見ると、ほぼ戦国時代中期より、楚文化は徐々に峡西地域に向かって浸透していき、西のかた遠く忠県一帯にまで浸透していった。ただし、当時の楚文化はこの地域から巴文化を排斥することもなく、巴文化と融合し共存したのである。例えば、〔重慶市〕雲陽県の李家壩墓葬群では墓中に多くの楚文化の要素が出土されており、甚だしいものでは楚文化の要素を主体としている墓も存在していた。しかし、青銅器と兵器の上の紋様はあくま

<sup>(88)</sup> 武漢大学考古系等「巴東県宝塔河遺址東周遺存」(『江漢考古』二〇〇七年第一期)。

<sup>(89)</sup> 岳陽市文物考古研究所等「巴東仁家坪遺址二〇〇二年発掘簡報」(『湖北庫区考古報告集(第三卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

<sup>(90)</sup> 湖南省文物考古研究所等「巫山高唐観墓群発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(91)</sup> 南京博物院考古研究所等「巫山瓦岡槽墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。武漢市文物考古研究所等「巫山瓦岡槽墓地二〇〇一年度発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(92)</sup> 重慶市文物考古所等「巫山水田湾東周・両漢墓葬発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(93)</sup> 武漢市文物考古研究所等「重慶巫山土城坂墓地二〇〇四年発掘簡報」(『江漢考古』二〇〇九年第二期)。武漢市文物考古研究所等「重慶巫山土城坂墓地二〇〇六年発掘簡報」(『四川文物』二〇〇八年第三期)。

<sup>(94)</sup> 河南文物考古研究所等「巫山秀峰一中戦国・両漢墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(95)</sup> 重慶市文物考古所等「奉節瞿塘関発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九九卷)』科学出版社、二〇〇六年)。

<sup>(96)</sup> 中国歴史博物館等「奉節魚腹浦遺址発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(97)</sup> 吉林大学边疆考古研究中心等「奉節宝塔坪墓葬群戦国・漢代墓葬発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇〇卷)』科学出版社、二〇〇七年)。吉林大学边疆考古研究中心等「奉節宝塔坪遺址二〇〇三年発掘報告」(『江漢考古』二〇〇五年第四期)。

<sup>(98)</sup> 重慶市文物考古所「奉節上関遺址発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(99)</sup> 中国歴史博物館故陵考古隊等「雲陽故陵楚墓発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(100)</sup> 鄭州市文物考古研究所等「雲陽馬沱墓地二〇〇一年度発掘簡報」(『重慶庫区考古報告集(二〇〇一卷)』科学出版社、二〇〇七年)。

<sup>(101)</sup> 鄭州市文物考古研究所「重慶市雲陽県馬糞沱墓地二〇〇二年度発掘簡報」(『文物』二〇〇四年第十一期)。

<sup>(102)</sup> 山東大学考古学系「四川開県余家壩戦国墓葬発掘簡報」(『考古』一九九九年第一期)。山東大学東方考古研究中心等「重慶市開県余家壩墓地二〇〇二年発掘簡報」(『江漢考古』一九九九年第一期)。

<sup>(103)</sup> 成都文物考古研究所等「重慶市忠県羅家橋戦国秦漢墓地第一次発掘報告」(『成都考古発見(二〇〇一)』科学出版社、二〇〇三年)。成都文物考古研究所等「重慶市忠県羅家橋戦国秦漢墓地第二次発掘報告」(『成都考古発見(二〇〇一)』科学出版社、二〇〇三年)。

<sup>(104)</sup> 北京大学考古文博学院三峡考古隊等「忠県崖脚墓地発掘報告」(『重慶庫区考古報告集(一九九八卷)』科学出版社、二〇〇三年)。

でみな巴文化のものを採用していたため、一般に研究者はこの墓を巴人の墓と考えているのである。こうした楚文化要素を持つ墓はただ雲陽県で発見されただけではなく、もっと西の忠県でも発見されている。例えば、忠県の崖脚墓地では大規模な楚文化の墓が発見された。忠県以西の地域では楚文化の要素はほぼ見られない。ここから見れば、戦国時代中期以後に楚文化の峡江地域文化への拡大は、もっとも遠くて忠県一帯にまで及ぶものであったと考えられよう。だが、その後ほどなくして秦は峡江地域を併呑し、その後に秦が滅亡し〔漢が中国を統一し〕漢文化が興起すると、この地域は漢文化の中の一つの分布地域となったのであった。

## 七 結 語

以上の分析から、峡江地域の先秦時代の文明の発展過程および東西地域の文化交流は、おおむね「一つの技術、二つの伝統、三つの衝撃」として概括することができよう。

このうち「一つの技術」とは、石器剥片の一つの技術、すなわち「鋭稜砸撃法」〔鋭角両極打法〕である。

ほぼ旧石器時代中期あるいは晩期の開始したころ、峡江地域には特色的な剥片石器の技術「鋭稜砸撃法」が出現した。この技術はすぐに峡江地域で先秦時代を通じて最も重要で特色のある剥片石器作成技術となった。それ以後、峡江地域の文化に変化が生じて、この技術はずっと継承されていった。この技術が出現し、また長期的に峡江地域で継続した原因は恐らくこの地域には河川のもたらした大量の河卵石〔河流で丸まった石、river-run gravel〕が存在したからである。

また「二つの伝統」とは、「釜文化」と「罐文化」の伝統である。

ほぼ新石器時代中期、城背溪文化は峡江地域に沿って西へ伝播し、楠木園文化を形成した。そののち、「釜文化」の伝統は峡江地域で発展して継承されていった。だが、屈家嶺文化が発生し西進して峡江地域に入り、釜文化の発展は影響を強く受けることとなった。それ以降「釜文化」は衰退し、主導的地位を明け渡したのである。ただし峡江地域から「釜文化」の伝統が消えたことは一度もなく、ずっと継続したのである。殷代の晩期に路家河文化が形成されると、「釜文化」は復興し、再び峡江地域の特色ゆたかな文化となった。その伝統は、東部からの楚文化の進入にしたがって西へと移動し、縮退しながらも戦国期に峡西地域で楚文化要素と共存していった。最後に秦が峡江地域を併呑し秦が滅亡、漢の文化が興起すると、「釜文化」の伝統もまた漢文化へと混淆していったのである。

また、もうひとつの伝統は「罐文化」である。〔河南省三門峡市陝県から出土した〕中原の廟底溝文化の影響のもとで大溪文化が形成された頃、峡江地域では「罐文化」を主たる特色とする文化が形成され始めた。この文化は西から東にむかって拡張し発展していく。そして三星堆文化が東進してくると大きな衝撃を受け、「罐文化」の伝統は三星堆文化の

拡大によってその継承発展が混乱していった。ただし、「釜文化」と同様に衝撃を受けても途絶することはなく、その地位を以前と比べ低下させながらも、その後の文化へと継続していったのであった。

また「三つの衝撃」とは、屈家嶺文化が峡江地域に広がり浸透したこと、三星堆文化が峡江地域に広がり浸透したこと、周楚文化が峡江地域に広がり浸透したことを指す。

屈家嶺文化が峡江地域に広がり浸透したことで、峡江地域の「釜文化」伝統の継続と発展は妨げられ混乱し、繁栄していた「釜文化」は衰退した。また三星堆文化は峡江地域の「罇文化」の伝統の継続と発展を妨げ混乱させ、かつて非常に繁栄していた「罇文化」も衰退した。ただし、三星堆文化は〔もともとの本拠地である〕西へ縮退していくと、「釜文化」へ〔復興できる〕“条件”を提供した。そして周楚文化が峡江地域に広がり浸透するとともに、復興した「釜文化」は今度は西遷し、鬲を最も特色とする楚文化と峡西地域に共存することとなった。周楚文化の西進は峡江地域の全体の文化構造を変えることとなり、最後に秦帝国による短期の中国統一と漢文化の形成により、峡江地域は漢文化の範疇に組み入れられたのであった。